

# 「鉄骨造耐震ルート1-1,1-2」 の文章問題攻略

「鉄骨造耐震ルート1-1,1-2」  
出題頻度の高い過去問を理解

## ・筋かいの保有耐力接合(過去問を抜粋) • 令和2年～平成22年で8回出題

「ルート1-1」の計算において、標準せん断力係数 $C_0$ を0.3として地震力の算定を行ったので、水平力を負担する筋かいの端部及び接合部については、保有耐力接合としなかった。

- 平成30年、平成28年 不適当な選択肢として出題

引張力を負担する筋かいを保有耐力接合とするために、筋かい端部及び接合部の破断耐力より、筋かいの軸部の降伏耐力のほうが大きくなるように設計した。

- 平成29年 不適当な選択肢として出題

引張力を負担する筋かいにおいて、接合部の破断強度は、軸部の降伏強度に比べて十分に大きくなるように設計する。

- 令和2年、令和1年、平成26年、平成25年、平成22年 正しい選択肢として出題

- ・標準せん断力係数、偏心率(過去問を抜粋) 令和2年～平成22年で5回出題

「耐震計算ルート 1－1 及び 1－2」では、標準せん断力係数  $C_0$  を 0.2 として地震力の算定を行う。

- 令和1年、平成26年 不適当な選択肢として出題

「ルート 1－2」の計算において、標準せん断力係数  $C_0$  を 0.3 として地震力の算定を行ったので、層間変形角及び剛性率の確認を行わなかった。

- 令和1年、平成28年 正しい選択肢として出題

「耐震計算ルート 1－2」では、偏心率が 0.15 以下であることを確認する。

- 平成26年 正しい選択肢として出題

- ・冷間成型角型鋼管(過去問を抜粋)
- ・令和2年～平成22年で4回出題

「ルート1－2」の計算において、冷間成形角型鋼管を柱に用いたので、柱梁接合形式及び鋼管の種類に応じ、応力を割増して柱の設計を行った。

- ・平成29年、平成28年、平成23年 正しい選択肢として出題

「ルート1-2」で、厚さ6mm以上の冷間成形角型鋼管を用いた柱を設計する場合、地震時応力の割増し係数は、建築構造用冷間ロール成形角型鋼管BCRより、建築構造用冷間プレス成形角型鋼管BCPのほうが大きい。

- ・令和2年 不適当な選択肢として出題